発達段階に合わせた折り紙の教材化

学籍番号：５１１１０６３
氏　　名：藤本　弥和

１．研究動機と目的

幼稚園実習の実習園では、教室の端にいつも折り紙数色と折り方の本が数冊置かれていました。折り紙は男女問わず人気で、幼児たちの折るときの表情はとても真剣で集中しているように見えました。１人で折ることができるようになると、工夫して改造したり飾ったりしていました。例えば、クワガタの大あごのところをはさみでギザギザに切ってノコギリクワガタにしたり、完成したクワガタを箱に入れて標本にしたりしていました。これら実習での体験により折り紙遊びによって幼児は思考力、言語表現力、創造力、想像力、理解力、記憶力などの力を獲得することができるのではないかと考えたのが本研究を始めたきっかけです。

本研究では「発達段階に合わせた折り紙の教材化」をテーマに、意欲的な幼児を育てるための理論的背景と実践的手法について研究を行いました。

２．研究の方法

まず理論的背景について、幼児の思考と運動機能の発達を明らかにするために①ピアジェによる認知発達、②保育所保育指針における乳幼児の発達の特徴、③幼稚園指導要領解説を調べ、発達段階ごとの目標を設定しました。次に、教育史の中で、ホイジンガ、カイヨワ、ピアジェが遊びの定義と効用についてどのように捉えているのか調べました。また、折り紙の効用について川並知子、岩瀬敏子、中山千章らの先行研究を調べました。

次に実践的手法として、意欲的な幼児を育成するため、乳児期から幼児期（０～６歳）までの発達段階と基本的技能の難易度を考慮して折り紙を分類し、レディネスに合った折り紙遊びの系統表を提案しました。

実践化においては手順ごとに本物の折り紙を貼り付けた「折り紙ノート」に着目し、先行研究者から直接指導を受けながら自作しました。そして、作成し

た折り紙ノートの有用性を検証するため、実際の保育園で１～４歳児を対象に調査を行いました。最後に調査結果の分析をもとに、より良い折り紙ノート作りの方法を考察し、改善案を作成しました。

３．結果及び考察

１ページ１工程で構成する折り紙ノートは使い始める年齢によっては有効であるが、1・2歳児には必ずしも必要だとは言えないようです。折り紙ノートを読み取ることができるようになってからでないと折り紙ノートを使って自分で折ることはできません。折り紙ノートを使って折り紙遊びができるかどうかは図形認識能力など個人のレディネスによって決まります。誰でも初めから折り紙ノートを理解することは難しいので、折り紙ノートを仲介にして保育者と一緒に折ることから始めると良いことが分かりました。また、実物を貼った折り紙ノートではなく平面的な折り紙の本だと理解力の差により作業時間に差ができ、早い幼児が遅い幼児を待つ間に集中力や意欲がなくなる場面がありました。自分でどんどん進める幼児は、先生が折り方を教えるのではなく別の方法、つまり折り紙ノートを使って折ることで集中や意欲を切らすことなく折ることができます。それにより、保育者は１人で折ることのできない幼児にじっくり時間をかけることができるようになるメリットがあることも分かりました。

実地調査の結果からは私の想定と異なる部分が多くみられました。保育者の関わり方や幼児自身のレディネスや性格などの要因によって技能の個人差が大きいことや調査を通して幼児の探索や模索の大切さや保育者の役割について分かり、良い経験になりました。

保育室の片隅に折り方の本と折り紙を置いて環境設定をすることは容易です。その際に幼児の発達段階に合った折り紙遊びを設定し、幼児が自力で折れる折り紙ノートを用意することで幼児は折り紙遊びをより楽しむことができるようになると分かりました。

これから保育現場に出て、伝承遊びの一つである折り紙遊びの楽しさを私から幼児に発信していきたいと思います。

（指導教員　福井広和）